

学園における 社会福祉基礎構造改革

愛成学園施設長 片山 泰伸

「親思う心にまさる親心 今日のおとずれ 何ときくらん」長い間続いた社会事業法の時代から「利用者主体」を中心とした社会福祉法に福祉の流れが変わっていきます。これを、社会福祉基礎構造改革と呼んでいます。言葉から受ける印象は、「とっても大変なことになるんじゃないかな。」ということになるでしょうか。

でも、落ち着いてこれまでの利用者の人たちの歴史を振り返る時、この「社会福祉基礎構造改革」の意味するところは、私たちが長い間社会から受けた中で培われ、そうせざるを得なくなってしまった心を、「ふつうに戻していく。ふつうに開いていく。」という方向に意識を変えていくこうとするものではないでしょうか。

障害があるということだけで、その当事者と家族は社会的に大きなハンディを背負うことになりました。その為に、その当時は、親心としてその子は自分たちで何とか護っていくしかない。そう決意せざるを得なかったのだと思います。人に言うことは出来ない。ましてや、親族からも護らなくてはならなかつたかもしれません。そういう心労も重なってのことでしょう、ある日福祉事務所を尋ね、その結果

として、利用者本人の願いとは違った形で一人で施設での生活を送るようになったのだと思います。本当は、この時に孤独という自立を選択させられたのかもしれません。

その当時施設のスタッフは、何とかして利用者の方を一人前に、私たちの手で指導したい、教育したいという思いがありました。社会に理解がないのなら、私たちが、…。そういう熱い想いがあったことも事実だと思います。

なのに何故、「社会福祉基礎構造改革」になってくると思われますが、それは、きっとその年代に合った一人の人間として関わっていこうという人権思想、人としての誇りを大事にしていくこう、そのように私たちの意識を変えていく。そういう宣言に私は理解しています。

「園長先生行って来ます。」学園から外出する時に、必ず事務所の玄関で挨拶が交わされていました。帰園された時には、「園長先生帰りました。」という挨拶です。大人になった人が、何故ここまでしなければならないのか。その風景には、辛いものがありました。

大人の女性が、「おしゃれをしたい。」と思うのも

ふつうことだと思います。色々な所にいって仲間をつくりたい。これも普通の願いだと思います。あの時に身近なところに、私たちを支えてくれるサービスがあつたら、もう少し同じ家で生活できたのに。

ご指摘されるように一年間、日中活動に多くのスタッフを配置し、片寄りがあつたかもしれません。しかし、その結果日中活動はそれなりの充実は認められますし、整備されたと思います。何よりも、利用者の方が地域の中で多くの人たちとの関わりが出来ました。また、サークルに参加することで、自分の役割を演じることが出来たり、在宅の方との交流から、その保護者の方の声から、生々しい暮らしぶりを聞く中で、働き方が見えてきます。

社会福祉基礎構造改革の意味するもの、それはもちろん制度が変わることにも繋がりますが、その前に、眼の前に暮らしているメンバーを一人の大人としてどう付き合っていくことが出来るか。それが本当に出来るか。その積み重ねだと思います。

本当に出来るか。……でも、いつかきっと。